

体育センターによる平成26年度重点公開講座の振り返りと総括

著者	嵯峨 寿, 本間 三和子
雑誌名	大学体育研究
号	37
ページ	74-74
発行年	2015-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124262

体育センターによる平成26年度重点公開講座の振り返りと総括

嵯峨 寿, 本間三和子

「筑波大学移動キャンパス」と大仰に銘打った方がいいが、キャラバン隊を快く受け入れてくれる所があるか、正直不安もあった。費用の一切合財をこちらで負担するというのも逆に警戒感を招くのではないか危惧された。終わった今、どれも杞憂であった。

茗溪会の全国都道府県支部の代表者が集まる総会で案内をしていただき、すぐに佐賀県より要請があり、幸先良いスタートが切れた。

10月南会津での剣道教室は、地元NPOの求めに鍋山先生が出向いていた剣道教室の財政難が伝えられ、出前公開講座という形で支援する運びとなった。

11月の大阪市での講座は唯一、座学形式のもので、大阪出身の本間先生がスポーツ科学の基礎と応用についてシンクロを例に講義された。世話人の平澤あず先生は本学OGで、日頃から高校でのスポーツ科学の授業に苦戦していたようで、茗溪会ホームページで本講座を知り連絡を寄せた。お陰で、出前講座が、卒業生や日常の業務に追われ忙しい現職教員の研修機会となりうる可能性を見出すことができた。

12月の柔道教室は、「社会貢献プロジェクト」として3年前から行われている取り組みとのタイアップ。被災地の心情に配慮し、「支援・貢献」のニュアンスの強い看板はそろそろ控え、それよりは「公開講座」のネーミングで交流主体の活動への転換機になればと願っている。

1月の東北での野球教室は、何より天候、気温、風が心配されたが、奇跡的に風が止み青空が広がった。この講座は、奈良先生が申請獲得した「社会貢献プロジェクト」と人間系・手打明敏先生が主導する「復興支援プロジェクト」の一環として、体育、芸術、教育の三系教員が

コラボして実現した。野球教室終了後、芸術系の原忠信先生らのグループがこしらえた竈（かまど）でピザを焼くなど、交流会も地元の方々を交え賑やかに行われた。

最後を飾ったバスケットボール教室は、12月の柔道と同じ大船渡市で開催された。本学の博士課程（スポーツ医学）を修了し、地元で寺の住職をしている木村文律さんが大変熱心に大学と地元との橋渡しをされている。

公開講座の評価方法は全く検討しておらず、今後の研究課題となるかも知れないが、いずれの講座も、知識や練習方法など最先端を提供していると確信できる。佐賀市で行われた柔道教室の一コマである。実技指導員として同行した永瀬貴教君（体育専門学群3年）は世界選手権で優勝経験のある日本代表選手。代表合宿で行われている準備運動を紹介した際、受講者たちは明らかに戸惑った様子で固まってしまった。柔道の格式、厳しいイメージからは想像もできない、そんなのでいいのと思わず言いたくなるような準備運動なのである。これには引率の指導者たちも驚いた様子だったが、増地先生の説明を聞き、柔道にとって実に合理的な運動であることに納得したのである。

私事だが、高校時代、部活では練習中の水分補給は禁じられていた。1982年に筑波大学に入学し、高校までの実践がどれほど誤りに満ちていたか痛感させられた。情報化社会の今、以前とは違って最新・最先端のスポーツ科学も全国の津津浦浦まで届くようになっただろうが、かえってそれゆえ、その道の一流の指導者、アスリートの手ほどきを直接に受けられる経験と感激は計り知れないであろう。次なる目標は、名誉教授を講師に送り出したい。